

『幼年時代』

—〈無駄話〉のパッチワーク—

渡部 麻実

一

座談会「堀辰雄（昭和の文学）」（『群像』一九七五・四）において、堀の父が実父でないことは仲間うちでそれとなく承知していたと佐多稲子が発言し、さらに『昭和の文人』（新潮社、一九八九・七）で、それに関連して江藤淳の苛烈な批判を浴びて以来、堀辰雄の小説『幼年時代』は、書き手の出生の問題と容易に切り離し難いものとなった。しかしこうした背景は逆に、池内輝雄『『幼年時代』の虚と実』（『堀辰雄』文泉堂出版、一九七七・三）、福永武彦『内的独白』（河出書房新社、一九七五・一一）、中島昭『『幼年時代』再論—江藤淳『昭和の文人』を読む』（『堀辰雄』リーベル出版、一九九二・一二）、谷田昌平『溼東の堀辰雄』（彌生書房、一九九七・七）、竹内清己『現代文学の〈ヴイ〉堀辰雄と中野重治』（『東洋学研究』一九九九・三）二〇〇二・三）など、多くの優れた『幼年時代』論を誕生させる要因にもなってきた。ともあれ『花を持てる

女』（『幼年時代』所収、原題「花を持てる女 幼年時代拾遺」「文学界」一九四二・八）の「私」が、養父を実父と信じて疑わなかったと告白したことについて、堀は意識的に世間を欺いたと指摘し、「人倫そのものに抵触するような「嘘」で固め」られた小説的空間に、『幼年時代』のみならず堀辰雄文学の特色が見出せると述べたさきの江藤論は、堀文学を評価するうえで、簡単に捨てることのできないものとなっている。本稿では、あくまでテキストを読む行為を通じて、あえて副次的にこの問題に関わってみたい。

『幼年時代』は、一九三八年九月から三九年四月にかけて雑誌「むらさき」に連載され、改稿を重ねつつ、『燃ゆる類』（新潮社、一九三九・五）、『幼年時代』（青磁社、一九四二・八）に収録された。二度の休載を含む連載の状況については、池内輝雄がきわめて詳細に検討し、夙に明らかにしている¹⁾。

ところで堀は、「リルケ・ノート」をはじめとする外国文学関係のノートに、幼年時代に関連する複数の言説を書き留めている。たとえば「リ

ルケ・ノートⅡ」には、「彼は或時は幼年時代のおもひでのうちに、或時は彼をとりかこんである巴里のうちに、又、或時は讀書の回想のうちに、自分の求めるものを發見する」(傍線堀)とある。このノートは、リルケの『マルテの手記』に関する読書及び研究のためのもので、堀はこれに、J. F. Angelloz: *Rainer Maria Rilke*, 1936 所収の『マルテの手記』論を摘録している。リルケは、『マルテの手記』に限らず『ドゥイノの悲歌』等でも(幼児)に注目し、度々それを描いていた。² ちなみに「リルケⅡ」の成立は、筆者の推定では一九三七年初頭である。³ 『幼年時代』の冒頭の一篇「無花果のある家」(原題「最初の記憶」)が書かれたのが一九三八年なので、「リルケⅡ」で堀が注目した、リルケにおける回想の価値と取り扱い方が、『幼年時代』の一つの源泉を成していることは想像に難くない。

さらに、これまでおよそ問題にされたことのない別のノート「ジュリアン・グリーン」にも、以下の興味深い一節が見出せる。

私の本のなかでは、恐怖とか、その他のいくぶん強い情緒(emotion)の観念は、説明できない風に階段といふものに結びついてゐる。

(略) 私は自分でも気がつかずに、どうしてさういふ効果を屢々繰り返すのかを考へてみた。子供のころ、私は階段のなかで誰かが自分を追ひかけて來はすまいかとおもつた。(略) 多くの小説家にあつては、彼等にものを書かせるものは、疑ひもなく、souvenirs

immémoriauxの蓄積だ。

管見では、このノートが書かれたのは堀の最晩年にあたる一九五一年以降だ。⁴ グリーンが恐怖と階段との結び目をほどこしたところに幼児期の

経験を見出し、さらに「souvenirs immémoriaux」と書く行為を密接に結びつけた点は見逃せない。グリーンが言うように、「souvenirs immémoriaux」は、しばしばエクリチュールの源泉あるいは原動力となるものだ。しかし「souvenirs immémoriaux」自体を描こうとした、それを現時においてまざまざと見出し、直すことを試みた小説家はそれほど多くない。そしてその代表は言うまでもなく、マルセル・ブルーストである。

グリーンがこうで言う「souvenirs immémoriaux」を邦訳すれば、もはや記憶にないほど大昔の(immemorial)記憶・思い出(souvenir)ということにならうか。それにしても、もはや記憶にないような記憶というのは、「souvenir」という言葉で表されてはいても、むしろ忘却に近いものだろう。「ブルーストの無意志的記憶は、ふつう追想と呼ばれているものよりも、はるかに忘却に近いのではないか」⁵。ヴァルター・ベンヤミンもこう述べている。さて堀自身は、ブルーストと記憶・思い出との関係について、以下のような一節を書きとめてゐる。

(ブルーストに於ける時間、距離及び形式。)

○彼以前ノ「他ノ」作家ハ過去ヲ組立テルタメノ材料トシテ思出ヲ使用シタ。トコロガProustハ思出ソノモノ「トシテ」ヲ再現スルタメニ他ノアラユルモノヲ使用スル。

右の引用は、一九二九年のものと考え得る日記に見出せる。一九二九年といえ、堀が東京帝国大学を卒業した年である。「過去」「思い出」「回想」といった問題が、小説家としてのスタート地点に立つか立たないかのこの時期から、「グリーン・ノート」を書いた最晩年に至るまで、一

貫して小説家堀の関心事であったことが確認できよう。

二 カロツサの『幼年時代』

堀辰雄の『幼年時代』と西欧文学という点、第一にハンス・カロツサが問題にされてきた。堀自身にも以下の発言がある。

ハンス・カロツサの「幼年時代」を読み、彼がそれをただ幼児のなつかしい想起としてでなしに、そこに何か人生の本質的なものを求めようとしている創作の動機に非常に共鳴していたので、こんどの仕事にはさう期待はかけられなかつたが、とにかくさういふものへの試みの一つとしてやれるだけのことはやつてみようと考えたのだ。つた。／「幼年時代」はさうして書きはじめたものなのである。

（『花を持てる女』「文学界」一九四一・八）

また堀は、単行本『幼年時代』の「あとがき」でもカロツサに触れ、「最初、私にこの小説を書くことを思ひ立たせたものは、ハンス・カロツサの『幼年時代』を読んだことである。偶然、アグネス・ネイル・スコットといふ人の英訳を手に入れたので、何んの気なしに読み出していたら、ずんずん面白くなつてきて、二三日にして読了した。さうして私は大へん感動した」と述べている。さて、堀が手にしたスコット訳の『幼年時代』—Hans Carossa: *A Childhood*. Translated by Agnes Neill Scott. Martin Secker, 1930（神奈川近代文学館蔵）—は、堀辰雄の蔵書として現存しており、そこにはいくつかの印が青鉛筆で付けられている。

十分に長いあいだ、猛烈な速さで腕を振りさえすれば空中に飛びあがれる、と、こういった感情が不意に姿をあらわした。私はひろびろとした野原をさがし、練習を開始した。ところが、一匹の大きな猟犬の姿をして、思いがけずも重量の霊が私に近づいて来た。彼は私の運動に興奮して、私の腕に深く咬みついた。（鱒）

気に入った虫はすべて、特に紅や緑に輝ききれいな甲虫などは、きつと神様のお気にいりのものたちにちがいないと思ひ、親しく呼びかけながら彼等のゆくまにまかせたけれども、反対に醜い暗い素性のもの、蝮やばさみみしや多足類、とりわけ異常に速く走る虫どもには冷酷な仕打をした。彼等の速さは心にうしろ暗さがあるからだと思はれた。（略）ときには、すばらしい鬼蜘蛛があらわれた。彼等は母の捕殺名簿のずっと前の方に載っていたのだが、私はどうしても殺す気にはなれなかつた。彼等は真紅で、天鵞絨のしつとりした軟かさをもつていた。生きた宝石のように、黒い地面を抜けて出すかと思つとすばやく姿をかくした。好んで私は彼等を自分の人差指に沿うて指先まで走らせ、太陽が彼等の桜色に燃える血をすかして輝くのを見ると、ふたたび彼等を自由にしてやつた。（花園）

広場と近所の家々は、屋根裏の物置の窓から眺めると、妙に見覚えがないように思われ、位置が狂っているように見えた。それでいて、自分の知っているものは、みんな眼の前にあるのであった。このことは私をいっそう愉快にした。私は熱心に搜索をつづけはじめた。（「掘出物」）（齊藤栄治訳『幼年時代』岩波書店、一九五三・一六）

右に、堀が印をつけた箇所を、その邦訳により引用してみたが、果た

してこれから何を読み取ることができるだろう。ここには、重大な打ち明け話がかかれていないし、ある記憶を触媒として現前に過去をまざまざと蘇らせるような仕掛けが見出せるわけではない。単に、幼児期におけるたわいもない出来事、《無駄話》とでも言うべき小話が積み上げられているに過ぎない。そもそもカロッサの『幼年時代』の構成要素は、このような、かろうじて忘却を免れた過去の断片ばかりなのだ。

もつともカロッサにあつては、ばらばらの断片に見えるそれぞれのエピソードが、実は随所で相互に関連づけられてもいるようだ⁶。過去の品物を、それから少し進んだ過去に再登場させることで、カロッサは、流動的なものとしての過去を描き出す。しかし、堀が蔵書に印をつけたのは、そのような流動する過去でも、各章相互の有機的なつながりでもなく、なぜか記憶にとどまっている、何気ない思い出であった。

だが、そもそも不意に浮かんでくる幼年時代の記憶とは、「私」の秘密を炙り出すような、あるいは読者の冒険心をひきつけてやまないような特殊なものではなく、むしろこうした《無駄話》に近いものではないだろうか。堀は、回想をこうしたものとして扱い、特別なことは何も語り出していない断片を積み上げたところに、ある一つの幼年時代を浮かび上がらせた小説として、カロッサの『幼年時代』を受け取ったのではないのか。

ところでカロッサの『幼年時代』の影響は、堀の『幼年時代』の中に、具体的に指摘することができる。たとえば強気な性格で、おとなしい子供の典型のような「私」を支配下に置く、カロッサの描く少女「鱈」と、堀の描いた「お竜ちゃん」の類似には、カロッサの影響が明らかに読み取れる。二人の少女については、その勝気な性分や口調が似ているだけでなく、仲たがいの後で、それぞれ火事と洪水という災害によって「私

と感動的な仲直りを果たすというエピソードまで、きわめてよく似ている。こうした、比較的分かりやすい形で見出せる影響関係は、受容の初期段階に現れやすいものだろう。これに對して、表面的な類似は見出し難いものの、堀の『幼年時代』の底を一層しっかりと流れているのが、ブルーストである。

三 ブルーストの無意志的記憶

饗庭孝男は、「純粹記憶をあまりに大切に切り扱ひ」過ぎ、「比較的氣楽」に書ける「小品」という体裁をとつたために「平面的に情景をつなぎ合わせる」という方向に逸した感があるとして『幼年時代』の欠点を指摘した福永武彦の解説を批判的に紹介しつつ、『幼年時代』におけるブルーストの影響を、以下のように論じている。

庭土の香り、金屑のにおいが幼児を喚起するという条り等、ブルーストの『失われた時を求めて』の第一巻にある喚起の「偶然」的契機を果す感覚印象のかたちをとっている点を見ても、決して「氣楽」なものとはいえない(略)。ブルーストの幼児の思ひ出は、カロッサの論理性よりもはるかに堀辰雄には親しい共通項となつたに違いない。(略)明らかに『幼年時代』の回想はブルーストの影響なくしてはありえないものである。ただ堀辰雄に欠けていたものは、ブルーストの感覚印象の喚起とその表現の徹底性であり、凝縮の問題よりも、そうしたものを自在にあやつるイデーの力と展望とその自覚であつたと言えよう。

ただ堀辰雄はブルーストの先駆性を知っていたし、その方法が自

己の幼年時代の喚起にまたとない働きを持つことを見抜いていたのである。(略)「美しい村」の出来よりも『幼年時代』の方がすぐれている点もそこにある。⁷⁾

しばしばブルーストの影響が論じられてきた『美しい村』より『幼年時代』の方が、『失われた時を求めて』の理解が進んでいるという饗庭の見解には賛成だ。しかし従来の見方に反し、近年筆者が指摘したように、『美しい村』には、形成過程においてブルーストの影響を積極的に離れようとした形跡がはっきりと感得できる。ゆえにブルースト理解の徹底度とその活用の巧拙によって、『幼年時代』の方がすぐれている」と判断することには首肯できない。だがそれはともかく、饗庭が指摘するように、『幼年時代』の回想はブルーストの影響なくてはありえない。また竹内清己は、小品「春浅き日に」(『帝国大学新聞』一九三三・三)に触れつつ、「意識の闕をめぐる「記憶」の想起法に、ブルースト受容が持続している。カロツサの『幼年時代』の影響の下張りとして」と述べている。『幼年時代』における回想にブルーストの影響を指摘できることは間違いない。

そもそも、「カロツサの『幼年時代』を読み、彼がそれをただ幼児のなつかしい想起としてでなしに、そこに何か人生の本質的なものを求めようとしている創作の動機に非常に共鳴していた」(前出『花を持てる女』)と述べた時、堀は『幼年時代』におけるカロツサの影響を告白したと同時に、実は、ブルーストの影響をも告白していたのかもしれない。何故なら現在から過去を遡ろうとするanamnese(想起)とは、ブルーストが無意志的記憶の対極に位置づけた知性による記憶、すなわち色あせて何の魅力も持たない記憶に依拠した行為なのだ。

それにしても、記憶が知性の支配下にならないとは、具体的にどういふことなのだろうか。以下は、『失われた時』の一節である。

われわれの記憶の最良の部分は、われわれのそと、すなわち、雨もよいの風とか、部屋にこもった臭気とか、燃えだした薪の最初の炎の匂とかのなかにある(略)。われわれの視線をのがれたところに、長いまたは短いへだたりをもった忘却のなかにある。ときどきわれわれが、かつてあった自分の存在をふたたび見出し、そうしたかつての自己が接したままの事物に当面し、新しく昔の苦しみを苦しむことができるのは、ひとえにそうした忘却のおかげなのだ、なぜなら、そのようなとき、われわれはもはやわれわれではなく、かつてあった存在なのであり、その存在は、いまのわれわれにとって無関係なものを愛していたからなのである。

(「花咲く乙女たちのかげに」第二部)

半長靴の最初のボタンに手をふれたとたんに、何か知らない神聖なもののがわれに満たされて私の胸はふくらみ、嗚咽に身をゆすられ、どっと目から涙が流れた。(略)私はいま、記憶のなかに、あの最初の到着の夕べのままの祖母の、疲れた私をのぞきこんだ、やさしい、気づかわしげな、落胆した顔を、ありありと認めたのだ、それは、(略)私の真の祖母の顔であった、(略)無意志的で完全な回想のなかに、祖母の生きた実を見出したのだ。(略)たったいま―その葬送後一年以上も過ぎたときに、しばしば事実のカレンダーを感情のそれに一致させることをさまたげるあの時間の錯誤のために―はじめて祖母が死んだことを知ったのだ。

(「ソドムとゴモラ」第二部「心情の間歇」)

ブルーストにおける、理性の支配下でない無意志的記憶とは、完全な回想、感情的記憶と言ひ換え可能な概念である。これをさらに言い換えれば、もはや記憶にないほど遠い幼児期の記憶ということもできよう。幼児の眼差しは、理性の支配、体系的な思考、モラルといったものから隔たつたものだ。幼年時代が保存されているのは、無意志的記憶のなか、忘却のなかつたことになる。無意志的記憶は、意識的な追想行為によつては引き出せない。無意志的記憶、忘却のなかに眠る記憶が蘇る場所は、予測不可能な偶然のなかだ。つまり、無意志的記憶を意志的記憶と対立させ、前者に価値を見出すなら、幼年時代を描くということは、こうした不意に現れる光景に表現を与えることに他ならない。それは、事実を構成し直すことでも、情報を時間的順序に従つて再構成することでもない。むしろ時間的順序や事実を無視したところで行われる、その意味において伝記作成の対極に位置づけ得る行為ということになる。叙述が無意志的記憶に依拠する度合いが高いほど、その内容は、偶然かつ突然現在のなかに飛び込んで来た光景のパッチワーク、〈無駄話〉的な小話の集合のようになるはずだ。もちろん、それを小説に仕立てるには統一が必要だ。だが、組み合わせることと組み立てることがイコールではないように、統一と構成もまたイコールではない。

四 『幼年時代』における価値ある無駄話

筆者はかつて、堀辰雄によるブルースト研究の時期を二分し、一九三〇年前後（昭和初年代）を第一期、一九四三年以降を第二期と呼ぶことを提案した¹⁰。『幼年時代』が書かれたのは、ちょうどその空白期にあたる。この時期に、堀が新たにブルーストを研究した形跡はほとんど見ら

れない。だが、新たな撰取が試みられていないからといって、すでに獲得した理解が失われるわけではない。それどころか、第一期におけるブルースト研究の成果が十分に内化されていたために、『幼年時代』を生成するにあたり、外的要素として改めてブルーストを参照する必要がなかったと考えることも可能だ。『幼年時代』こそが、ブルースト研究の第一期が結実した形なのかもしれない。

その証拠に、『幼年時代』におけるブルーストの影響は、模倣と紙一重のあからさまなものでは決してないが、注意深く観察すると、『幼年時代』の随所に、ブルーストの痕跡を見出すことができる。

自分の幼児のことを人に訊いたりするのは何んだか面映いやうな気がして、自分からは一遍も人に訊いたことはない。そして私はこれらの思ひ出がそれ自身の力でひとりりで浮かび上がつてくるがままに任せておくきりなのだ。（第一章「無花果のある家」）

私の意識上の人生は、突然私の父があらはれて、そんな侘住ひをしてきた母や私を迎へることになつた曳舟通りに近い、或る狭い路地の奥の、新しい家のなかでやうやく始つてゐる。（略）その頃の事は、その家ばかりではなく、私に思ひ出されるすべてのものはいづれも切れ切れなものとして、そしてそのために反つてその局所局所は一層鮮かに、それらを取りかこんだ曖昧模糊とした背景から浮かみ上がつて来るのである。（同「無花果のある家」）

「意識上の人生」という風変わりな表現は、意識にのぼらない、無意識の人生があるという暗黙の前提があつたものだ。つまりこれは、ブルーストにおける意志的記憶と無意志的記憶の対立にほぼ等しいと考え

られる。そしてもちろん『幼年時代』において、積極的、優先的に表現を与えられているのは無意識の人生の方である。

唯一つ、前述の記憶だけが妙にはつきりと私に残っているといふのは、その火事の話が事実でないとすれば、恐らく昼間のさまざまな経験が寄り集つて一つの夢になるやうに、自分のまだ意識下の二つの強烈な印象が、その他の小さな印象を打ち消しながら、さうやつて一つの記憶の中に微妙に融け合つてしまつていゝのかも知れない。^(註一)

註一 火事があつたのは丁度私の四歳の五月の節句のときで、隣家から発したもので、私の家はほんの一部を焼いただけですんだ由。(略)

花火から茅葺屋根に火がうつつて火事になつたのは、三囲稲荷のほとりの、其角堂であつた。そしてそれは全然別のときのことであつた。(同「無花果のある家」)

「註一」というのは原注だが、堀は、日頃から小説に注をつけているわけではない。「昼間のさまざまな経験」が事実だとしても、それが「寄り集つて」夜見る夢は、むしろ事実と反することが多いだろう。幼児の記憶は、ときに幻視をも含む。右の引用は、無意志的記憶の現前化とは違うが、意志的記憶に依拠した叙述でもない。ちょうどその狭間にたゆたうものだ。重要なのは、記憶と事実との齟齬が、注を付すことにより明らかにされていること、そして、事実の方は本文に組み込まれず、脚注扱いにされていることだろう。つまりここでは、回想と伝記的事実とは同じではない、回想は伝記的事実より価値がある、この二つのことが宣言されているのである。

ちょうどブルーストが『失われた時』の冒頭で、「あたかもコンプレーはせまい階段でつながれた二つの階からしかなりたつていなくて、そこには夕方の七時しかなかったかのようであつた。(略)コンプレーはまだほかのものをふくんでいたし、ほかの時刻にも存在していた(略)。しかし、そういうものから私が何かを思いだしたとしても、それは意志的な記憶、理知の記憶によつてもたらされたものにすぎないであろうし、そんな記憶があたえる過去の情報は、過去の何物をも保存していない」「過去を喚起しようとしてとめるのは空しい労力であり、われわれの理知のあらゆる努力はむだである。過去は理知の領域のそと、その力のおよばないところで、何か思いがけない物質のなかに(そんな物質があたえてくれるであろう感覚のなかに)かくされてある」と述べ、続けてあの有名なプチット・マドレーヌの件を描くことで、『失われた時』の哲学をはやばやと読者に提示してみせたように、『幼年時代』でも、冒頭「無花果のある家」において、やはりその哲学が示されているのである。

このようにして、叙述が拠つて立つ理論が示されたのち、『幼年時代』も、カロツサの『幼年時代』、あるいはブルーストの『失われた時』『風の無駄話』の形をした無意志的回想のパッチワークとなる。

おばあさんは大抵私を数町先きの「牛の御前」へ連れて行つてくれた。その神社の境内の奥まつたところに、赤い涎かけをかけた石の牛がびびき臥ていた。(略)その石の鼻は子供たちが絶えずさうやつて撫でるものだから、光つてつるつるとしていた。

(同「無花果のある家」)

縁先まで押しよせてきている黴い水や、その上に漂っているさまざままな芥の間をすいすいと水を切りながら泳いでいる小さな魚や昆虫

を一人で見ているうちに、ふと私の思ひついたものは、こなひだ買つて貰つたばかりの新しい玉網だった。(略) 私はふとそれを思ひつくと、どこからか自分でその玉網を捜し出してきて、縁先きにしやがんで、いかにも無心に、それでもつて小さな魚を追ひまはしていた。(第五章「洪水」)

このように、『幼年時代』で表現を与えられた小話は、不意に浮かんでくる風景、局所の記憶といった類のもので、それらは積み上げられることで全体として一つの幼年時代を浮かび上がらせている。つまりこうした〈無駄話〉のパッチワークにより、『幼年時代』というテクストの中に、一つの幼年時代が止揚されているのであり、『幼年時代』でもっとも価値があるのは、これら切れ切れの〈無駄話〉にほかならない。

五 無花果の木―見出された幼年時代―

さて、こうした意志によらない回想のパッチワーク、数々の価値ある〈無駄話〉の中で、形を変えて幾度も表れてくる物がある。

その頃私達の住んでいた家のことを思ひ出さうとすると、(略)ごく切れ切れに―例へば、秋になるとおいしい果実を子供たちに与へてくれた一本の無花果の木や、(略)小さな庭だとか、(略)硝子張りの細工場だとか、―一つ一つ別々に浮んでくるきりである。そしてさういふものよりも一層はつきりと蘇つてきて、その頃のとりとめのない幸福を今の私にまでまざまざと感じさせるものは、(略)その無花果の木の或る枝の変にくねつた枝ぶりだとか、あるとき

庭土の香りだとか、或ひはまた金屑のほひだとか、さういつた一層つまらないものばかりだ。(第一章「無花果のある家」)

自分の前に、或時はすっかり冬枯れて、ごつごつした木の枝を地中の根のやうに空へ張つていた、―或時は円い大きな緑の木陰を落して、その下で小さい私達を遊ばせていた、一本の無花果の木をありありと蘇らせる。―「私にとつて、おお無花果の木よ、お前は長いこと意味深かつた。お前は殆ど全くお前の花を隠していた……」とリルケの詩にも歌はれている、この無花果の木こそ、現在では私もまた喜んで自分の幼年時代をそれへ寄せたいと思つている木だ。

(第三章「赤まの花」)

その日々、私は、その無花果の木かげに花筵だけは前と同じやうに敷かせて、一人で寝そべりながら、そんな実の出来具合なんぞ見上げていた(略)。(第四章「入道雲」、原題「夏雲」)

このように、無花果の木をめぐる光景を抜き出せばきりが無い。『幼年時代』において無花果の木は、「過去は理知の領域のそと、その力のおよばないところで、何か思いがけない物質のなかに(そんな物質があたえてくれるであろう感覚のなかに)かくされてある」(前出)とブルーストが述べたところの「物質」にあたるのだろう。

ちなみに筆者の見るところ、右の引用に含まれる「リルケの詩」は、『ドゥイノの悲歌』を指すものと思われる。

無花果の樹よ、おまえは花開くことの歓びをほとんど完全に跳び越えて、／誉め称えられることもなく 早くも決意し 熟した果実へと／おまえの純粋な秘密を せきたて導いてゆく、／ いつの時か

ら久しくも そのさまの私に深き意味を語り始めたのは。／噴水の導管のように、おまえの撓んだ枝々は／樹液を促して下降させ 上昇させる、そして樹液は その眠りの中から／ほとんど目覚めることなく この上なく甘美な成就の幸福の中へと 跳び込んでゆく。
(略)

心を抑えつ、なおこらえて踏みとどまる者は少ない。／おそらくは死という庭師にその血管が別様に撓められている／英雄たちと、若く死すべき運命の人たちだけだろう。(略)
不思議なほど 英雄は若く死せる人たちに近い。生命長らえることを／彼は気にかけない。

〔第六悲歌〕『リルケ全集』第四巻、河出書房新社、一九九一・五
花を持つ植物は、それを咲かせ美しさを誇る。しかし無花果は、内側に無数の花をつけるのだ。だからここでリルケは、「花開くことの喜びをほとんど完全に跳び越えて、／誉め称えられることもなく」と歌っているのである。そしてこうした無花果のあり方は、華やかに香ることをせず、賞賛されることもなく突き進み、命を永らえようとせず運命をまっとうして死んでゆく英雄と夭折者に重ねられる。「第六悲歌」に先立って、リルケはかつて『新詩集』のなかでも無花果を歌っていた。

海から吹いてくる太古の風、／それは ただ根源の岩石のために／吹いてくるようだ、／ただただ空間ばかりを／遠くのほうからひき寄せながら……
おお、おまえをどう感じているのだろう、／うみの高みで 月の光を浴びて立っている／一本の、実を結ぶ無花果の樹は。

〔海の歌〕『リルケ全集』第三巻、河出書房新社、一九九〇・一一

この詩に歌われた無花果の樹は、いまここで、太古の時間を引き寄せてくる太古の風を感じているのである。『幼年時代』において、回想の中心にしばしば無花果の木があることに、リルケの影を見ないわけにはいかない^①。『幼年時代』に繰り返し登場する無花果の木は、その都度変相し、やがて実を結び、ついには実を腐らせてゆく。リルケの詩に寄せて、変化を遂げる無花果の木の様子、その一つ一つの回想のかけらを積み重ねることで、『幼年時代』は一つの幼年時代の保存に挑戦しているのである。だがこのように、理知的な構成の力に支えられて、無花果の回想に幼年時代の一つの真実を語らせようとするとき、その回想は果たして無意志的な、すなわち完全な回想なのだろうかという疑問も残る。

さて『幼年時代』の回想は、最終章「エピロオグ」(原題「花結び」)に至り、すでに幼年期を抜け出した十二三歳の「私」を描き出す。

私はなんの期待もなしに黙つて彼についていった。しかし、彼が(略)私を連れ込んだ横丁は、ことによるとその奥で私が最初の幼児を過ごした家のある横丁かも知れないと思ひ出した。私は急に胸をしめつけられるやうな気もちになつて、(略)と、急に一つの荒れ果てた空地を背後にした物置小屋に近い小さな家の前に連れ出された。私はその殆ど昔のままの荒れ果てた空地を見ると、突然何もかも思ひ出した。(略)板塀の上から、すっかり葉の落ちつくした、ごつごつした枝先をのぞかせているのは、恐らくあの私の大好きだった無花果の木かも知れなかつた。

友人緒方の案内で、初めて彼の家に向かう道すがら不意に足を踏み入れた地で、「私」の現在に、突如失われた過去が侵入する。ここに描かれているのは、まさに一つの「再び見出された時」¹²に他ならない。『失われた時』の「私」が、紅茶に浸したプチット・マドレーヌによって、あるいは靴紐をほどこうとするふとした瞬間に、またあるときは敷石につまづいた刹那、突如失われた時を再発見したように、「私」はどうとうここに、一つの失われた幼年時代を見出した。それは、いまここにある荒れ果てた空地のうえ、その一つの物質のうえに、現在時を切り裂き、過ぎ去った過去が不意に姿を現した瞬間であった。

六

ジュリアン・グリーンにおいて、恐怖と階段との奇妙な結びつきを解明するカギが幼児期の経験にあることはさきに触れたが、実はこれとよく似たものが、口髭と好意という形で、『幼年時代』にも見出せる。

子供の私は口髭を生やした人に何んとなく好意を感じていた。

私の父は無髭だった。(略)それに反して、うちへ来る客のなかで、私の特に好意をもつた人々は、みんな口髭を生やしていた。

(第八章「口髭」)

或る葉屋の上に、大きな仁丹の看板の立っているのが目のあたりに見えた。私はその看板が何んといふこともなしに好きだった。それにも、大概の仁丹の広告のやうに、白い羽のふわふわした大礼帽をかぶり、口髭をびんと立てた、或るえらい人の胸像が描かれているきりだった(略)

(同「口髭」)

このように、「私」の中では好意と口髭の男性とが強固な結合関係を持つている。だがそれは何故なのか。

最近、父の死後、私ははじめて死んだ父が自分の本当の父でなかった事を知った。(略)私のをばさんの一人が私にはじめて聞かせてくれたのである。(略)生みの父(略)はなんでも裁判所の書記長かなぞしていた人とかで、立派な口髭を貯へていたことだけ妙に私は覚えていたと見え、私はそのよく知らない実父の面影を、子供らしい連想で、恐らくそんな突拍子もない薬の広告絵のなかに見出していたのだった。……

(初出「幼年時代」最終章「花結び」)

最終章で、『幼年時代』における好意と口髭の結合の秘密は、右のように明かされる。しかし実を言うと、右に引用したのは初出「幼年時代」の最終章であり、大幅な改稿を経て単行本『幼年時代』に収録され「エピオグ」と改題された『幼年時代』のそれではない。『幼年時代』を読む際、好意と口髭との結合の謎が、無意志的回想を通して解明されることを期待する読者は少なくないはずだ。だが単行本『幼年時代』では、そうした過去の再発見が行われることも、また外部からもたらされた情報によって、謎の解明が成されることもない。読者がその理由を知るためには、同じ単行本に収められた『花を持てる女』(原題「花を持てる女 幼年時代拾遺」『文学界』一九四二・八)を読まなければならない。

よく町の辻などに仁丹の大きな看板が出ていて、(略)それを見つけると、私はきまつてそのはうを指して、「お父うちゃん……」といつてきかなかつた(略)……それはおそらく自分の父がさういふ

美しい髭を生やした人であつたのをよく覚えていたからでもあつたらう。

ここでようやく、「私」における好意と口髭との不思議な結合の原因が、やはり幼年時代の記憶と関係していること、そしてそれが実父の失われた思い出であることが明らかになる。無意志的な回想によってではなく、単なる「私」の考察の結果として。しかも右のような考察を可能にしたのは、「自分の実父がほかにあつて、まだ私の小さいときに亡くなったのだといふことを聞かされた」という、おばによつてもたらされた一つの情報だ。情報からは、失われた過去は蘇らない。「過去を喚起しよう」とつとめるのは空しい労力であり、(略)過去は理知の領域のそと、その力のおよばないところで、何か思いがけない物質のなかに」(前出『失われた時』)隠れているのだ。反省は過去を取り戻す道具にはならない。情報の力を借りて「私」が意識的に取り戻した過去、理知が特定した記憶には、実父の真のイメージも、そして彼に抱いた幼児の「私」の感情も、一切保存されてはいなかった。『花を持てる女』で、「私」は明らかに、失われた過去を取り戻すことに失敗しているのである。

幼年時代を描くということは、情報を理知が再構成することではない。無意志的記憶、感情的記憶、あるいは完全な回想は、必ずしも伝記的事実と同じではない。『幼年時代』と『花を持てる女』との差異は、第一にこの点にこそ求められる。『幼年時代』の叙述は、人生をそれがあつたとおりに記録することから最大限の距離を保とうとするものだ。そしてその代わりに、エピソードとしての魅力はあつても、情報としてはたいた価値のない(無駄話)を積極的に積み上げていくのである。『幼年時代』が生成過程において、さきに引用した出生の秘密にまつわる「花

結び」のエピソードを失ったことは、テキストが進もうとした方向をはっきりと語り出しているのではないか。

『幼年時代』では、好感と口髭との結合の秘密が解明されることはない。同様に、「私はどういふわけか、父とは異つた苗字で呼ばれることになつた」と語られる『幼年時代』第九章「小学生」でも、父と自分の苗字が異なるという謎が追求されることはない。『幼年時代』において「私」の父親は、手製の迷子札を作つてくれた彫金師の男ただ一人なのだ。それが仮に伝記的事実に反するとしても、伝記的叙述から最大限の距離を保つことで幼年時代の保存を試みた『幼年時代』には、関係のないことだ。

それにも拘らず、冒頭で述べたとおり『幼年時代』論は、書き手の父をめぐる問題を容易に無視できない独特の状況に置かれてきた。ちなみに、養父上條松吉が死亡したのは、「幼年時代」連載中の、一九三八年一月である。書き手の周辺で、まさに書きつつある内容に関わる大きな悲劇が生じたことになる。小説に書かれた内容に即して書き手の倫理観を問うことに関心はないが、あえて付言すれば、『幼年時代』の連載続行を難しくし、その試みが不徹底に終わったとしたら、原因の一端は、父の死によって(無駄話)の蓄積が出来なくなったことに求められるのではないか。すなわち父の死と、養父であつたことを動かしがたい事実として突きつけられたことは、小説『幼年時代』には無関係でも、書き手にとつては大きな動揺を誘う事件であつたということになる。しかしそれでも、無意志的記憶、感情的記憶、あるいは完全な回想を見出し、そこに表現を与えようとする小説『幼年時代』は、あらゆる伝記的な事実、父に関連する謎をめぐる大人の理性が分析した内容と、無関係でなければならぬ。理知の力によつて出生の秘密を解き明かすこと、幼年時代

に理知のメスを入れることは、無意志的記憶の甦生、失われた時の再発見を試みる『幼年時代』が、もつとも遠ざけるべき事なのだ。それはテクストが、「最近、父の死後、私ははじめて死んだ父が自分の本当の父でなかつた事を知った。(略)立派な口髭を貯へていたことだけ妙に私は覚えていたと見え(略)恐らくそんな突拍子もない薬の広告絵のなかに見出してたのだった」(初出「幼年時代」最終章「花結び」という情報と分析とを削除する形に変化したこと、その、テクストの変形の様子にはつきりと刻印されている。

無意志的記憶の断片と事実との齟齬を指摘する理知の警告をあえて無視することで、不意に訪れる局所の記憶を言葉によって保存し、その全体を通して、ある一つの幼年時代を忘却のなかから救出しようとした小説が、『幼年時代』なのだ。

【注】

- (1) 「堀辰雄論―「本所」から「幼年時代」まで」(『大妻国文』一九七四・三)
- (2) たとえば鈴木健仁は、「リルケの詩作における幼年時代について」(『愛知学院大学論叢 一般教育研究』一九六八・七)のなかで、リルケの(幼年)観と作品について以下のように論じている。

リルケの作品のなかに、「幼年時代(Kindheit)」が、さまざまの形象のもとに、くり返し現れる。「マルテ・ラウリッツ・ブリッゲの手記」において、それは、マルテの回想によって呼び起された現実として、かれの経験する、パリの現実と同じ地平線上で、時間を超えて語られ、「新詩集」では、一回限りの失われた、取り戻しのつかぬものとして、その歎きがうたわれている。さらに、後期の詩では、「幼年時代」は、聖なるもの(das Nuni nose)の様相を帯びて、いっそう密に形象され、讃えられている。(略)そこで語られるのは、個々の幼年時代でもなければ、子供の人格でもない。問題になるのは、「子

供であること(Kindsein)であり、その成長の事象である。幼年時代は、リルケの詩作のもつ、根本的性格を担っている。(略)／非歌の最初のVerseは、幼年時代を神的なるもの(die Himmlischen)の恵みを受けたものとして形象化し、それに最高の地位を与えている。そして、それは、のちの、意識によって支配される世界(Dieses heilte Schicksal : gegenüber. (Werke I. Die achte Elegie s. 715)) においても、本来の貯えとして、軽減されることがないのである。

- (3) 拙稿「堀辰雄(外国文学に関するノート研究(二)―リルケ―)(その二)」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二〇〇三・三)参照。
- (4) ノートの内容と堀の蔵書中の書き込みにより、ノートの出典がJulien Green, *Journal*, tome 1, 2, Plon, 1951であることが確認できる。ゆえにこのノートは、一九五一年以降、つまり堀の最晩年に作成されたものと考える。なお、「グリーン・ノート」の詳細については別稿で論じる。
- (5) 「ブルーストのイメージについて」(『ペンヤミン・コレクション2』筑摩書房、一九九六・四)
- (6) たとえば箕作元泰は「根源への回帰―カロッサ『幼年時代』をめぐる―」(『拓殖大学論集』一九九〇・一)で、「二六の章は、相互に有機的なつながりをもつように構成され、作者の幼い心に刻まれた事物や人物は、音楽の主題が再現するように、間において再び姿を現す」と述べている。
- (7) 「西欧的(知)の基層―堀辰雄の『幼年時代』と『曠野』」(『イマジネーの考古学』小沢書店、一九九六・四)
- (8) 拙稿「美しい村」生成―ゲーテの『詩と真実』、あるいはスピノザ的無私との邂逅―(『国文学 解釈と鑑賞』二〇〇三・一二)参照。
- (9) 「堀辰雄における西欧文学―ブルースト受容の持続―」(『東洋学研究』二〇〇七・三)
- (10) 拙稿「堀辰雄におけるブルースト再受容―リルケ受容との関連において―」(『日本女子大学大学院文学研究科紀要』二〇〇二・三)参照。
- (11) リルケと『幼年時代』の関係については、小久保実「カロッサの『幼年時代』に刺激されて『幼年時代』を書いたとはいうものの、この場合はカロッサが一つのきっかけの役割を果たしたにすぎない、と私は思う。(略)カロッサが、リルケをわれわれの前に押し出してくるのである。」(『新版堀辰雄』麦書房、一九七六・一〇)という優れた発言がある。

(12) 『失われた時』最終章のタイトルは、「Le Temps retrouvé」すなわち(再び)「見出された時」である。

【付記】テキストの引用は筑摩書房版『堀辰雄全集第二卷』(一九七七・八)から行い、旧字体は新字体に改めるとともにルビ等は適宜省略した。なお、外国文学関係のノート(『堀辰雄全集第七卷(上)』収録)は、引用に際し、すべて堀家所蔵のオリジナルにあたり、漢字、仮名遣いともに原文の表記に従った。